

先月号で、整理番号9～12について、もう少し調べたいと述べた。これだけの内容をもった写しが、おさしづ書（以下、Aと記す）に掲載されていないのは、不可思議であると思われたからである。そこで、9の写しにおける特徴ある言葉、「身上の事情」に着目して、『索引』にあたった。22件の「おさしづ」があり、それを一つひとつ見ていったのである。しかし、そこに浮かんでくるものはなかった。中に「明治25年11月11日、瀬戸新七四十七才身上障りの処願、それに付、家内の身上も申し上げ願」があったので、一瞬、これかなと思われた。もちろん日付も年代も異なるが、近愛の役員、瀬戸新七の名がそこにあったからである。しかも「七」は縦書きすると、場合によっては「十一」が崩れたものとみることのできるもので、若干の期待をもったが、それではなかった。

次に各年代の「7月8日」の日付をみていくと、明治26年7月8日の「昨日日本席席の中に御声止まり霞むよう成りたるに付願」が、それに相当することが判明した。すると、それ以後の10～12も明治26年代のものとなる。これは、8が明治23年のもので、行間を空けることなく、「七月八日」と記されていたことにより、9は23年のものという思い込みがあった。そのことから、9がAに記載されていないのでは、と考えられたのである。なお「身上の事情」という言葉を手がかりに調べたときに、なぜ、この「おさしづ」浮かんでこなかったのか、という点については、この「おさしづ」の正文では「身上の事情」という個所が「身上事情」と記されていることによる。

改めて、9「七月八日」から翻刻していこう。

9 七月八日 本席御声さつはりかすむ二付御願
さあへ身上の事情 たすねる処、ふしきなる 又ふしぎなけねばならん 色々だんへの処 たすねる事情あ□てたすねるなかば こへのとまる処 なかいよふに思ふてもちがふ みしかいよふに をもふてもちがふ ふしぎへの間にきゝわけ 一つのはなししておく」(49オ)

何時とふゆふ事から あさやかやらわからん 又事情こゝろゑん 又なんとときどふゆふ事ともわからん まあとをいから はなしよふきゝとりて おかにやならん

10 七月十三日 昨夜の御指図ヨリ御本席様の身上御願
さあへ尋ぬる事情へ 尋ぬる事情ハ 尋ぬる迄の事あるふ 尋ねる迄のもの あさやかさとしたい 一時よるへよるへにおよばん なん時とふゆふ事」(49ウ)

さとしに出るやらわからん 一時事情はなす中□ふのも つかへてある 又あすのもつかへてある中に いろへあれどあれど はこはれん 席やすんだらいろへのせつ出る 色ゝのしやんでる そこでへみわけもつくやろふ 一寸やすんたら はじめかけるへ どふゆふ事はじめ これへまで ふるきはなし ふるき事情の里に だんへ年限 天年し然の里によつてはしめかけたる処 又とを」(50オ)

くはしめかけたる道にこへかいるへ どふゆふもの こへをするなら どんなさくもとれる どこからどこまで一時作るならん事せいとハゆわん いかなるも道にこへせにやならん こへなけねは まきながしのたねも同じ事 如何なるもきゝわ

けてくれるよふ 又めんへそれへよりくる中 あつく里ハ受取 だんへかさねへの道 けふよりあらためて 一つの はな」(50ウ)

し いくへの道 一時の道しやあるふまい とふしてくれよふ 事情たずねかけたる これからの道 あふなきの道もあれば たのもしい道もある あぶなき道よふかんにんして よふこの道ハむつかしい事ハいらん かにんこの道とはじめかけるといふよふ たずねてはしめかけてくれた かにんたかいむすぶなら あらへの道 かにんといふハ まこと一つの 里 天の里とさと」(51オ)

しおく かにんといふ里を定めるなら ひろくおゝきい里である あらへの道きいている きいたとまりわからん あいやへといふ これこゝまで こんにちきよといふ日ハ これまたかねてなんでもなき□□しよふ かにんいたゝいて とをれハ晴天とふよふ 一つの道と」(51ウ)

さとしをこふ

11 全日会長様身上御願

さあへ里ハーツへどをでも身にこゝろへん いづれへたずぬるといふへ しきつて事情あるふまい なれとこゝろへんといふハ たすぬるへ さしずへハこれまで如何なる事情 これまでさしずへといふたら 言一つ 第一ことは一つの里が第一 身に事情あればたすねにやならん まあへといふて じつとして」(52オ)

いるなり しきつた里てハない まだかゝる 尋ねにやならん まあへ尋ねにやならんよふになりたら あんじる あんじにやならん事情も有 かるきへまたさしす 指図ハ一寸はんだんつかんよふなもの さしすハーツもまちかいあらせんで まちかふといふハ まちかいへと思ふ里がまちがふてある 内々ハしんはしらへといふ これまでない事ばかり初めかけた それへふでにとめたる いろへの道もとをりたやろすれば一日なるほどの日ハみたである よふきゝわけ 又ことばさとすハ入込てのさとし そんなめい一つの」(52ウ)

里にさとする 皆きいている 指図十をバトナから きつしりしたるもの なれときゝとりよでまちがふ これきゝわて あついつ分も寒い時分も同じ事 あついつ分ハあついつい さむい時分にハさむい事しらす よふきわけへ これから一戸のしやんも出すよふ さしずこふゆふ指図 そんならすくと受け取 又一つの里とへあわせる里とへあわせバ 指図いらんもの 言□ふそへたらこふとゆふ 里とへ合せバいらんへ さしすハいらんものへ これさとす」(53オ)

参考までに、少し気にかかることを記しておく。52オの最後から52ウの最初の個所、「じつとして居るなり しきつた里てハない」は、正文では「じつとして居る。成り切った理でない。」と記されるので、「じつとして居るなりしきつた里てハない」とするべきか。また53オの4行目最後のところ「これから一戸のしやんも出すよふ」とあるが、正文では「これから一戸の思案持たず」である。なお10は、Aにあって「明治二十六年七月十二日夜」である。